



カワラナデシコ

本州・四国・九州に生育する多年生草本。

7月頃から秋にかけて可憐な花を咲かせ、全体のイメージはカーネーションに似ています。主に日当たりの良い草原や河原に生育しますが、路傍や山地の斜面、海岸の砂浜などでも見られます。最近では河川の管理や環境の変化の影響で、カワラナデシコに出会えなくなっている地域もあるそうです。秋の七草の一つであるナデシコはカワラナデシコのことです。

目 次

巻頭言

「教育研究所新規事業」について

小田原市教育研究所所長 2

1 小さなころみ

①「幼・小・中の生活実態調査を未来への指針に」

幼・小・中生活実態調査の研究に関する研究員 3

②「郷土読本「小田原」の改訂について」

郷土読本「小田原」改訂の研究に関する研究員 4

2 学びの架け橋

①「小中学校の連携をめざした国語の学習～書く力を中心に～」

国語 プロジェクト研修研究員 5

②「小中算数・数学指導の連携をめざして」

算数・数学 プロジェクト研修研究員 6

③「小中学校における自立に向けた授業づくり」

特別支援 プロジェクト研修研究員 7

3 教育相談指導学級から

小田原市教育相談指導学級責任者 8

4 ある教室から

「学ぶということ」

学校教育課指導主事 9

5 研究所たより

教育研究所指導主事 10

教育研究所新規事業について

小田原市教育研究所所長

小田原市の抱える今日的な課題を解決するため、研究所の事業は常に見直しをされています。平成19年度の新規事業の中で特に「パワーアップ研修」と「不登校対策強化事業」についてご理解をいただきたいと思います。

パワーアップ研修について

2007年問題は、教育界でも同様です。ベテラン教員の大量退職に伴い、質の高い教育の維持、並びに、次代を担う教員の養成を視野に入れた対策をとることが急務となっています。そこで、小田原市教育委員会と小田原市小・中学校長会は、合同で「小田原市パワーアップ研修運営委員会」を設置し、研修のあり方を協議しています。

本年度（初年度）は、教育実践の工夫改善に積極的に取り組んでいる教員を支援するため、個別課題に対応できる個別研修を年間通じて実施しています。また、学校や研修者に負担がかからないよう、研究所の研修相談員・研修指導員が学校を訪問して研修を行っています。

研修者については、各小・中学校長の推薦を受けた研修候補者から小田原市パワーアップ研修運営委員会が小学校6名、中学校4名の研修者を選考・承認しています。各研修者のテーマは、小学校が「言葉に感動できる児童の育成をめざして」「一人ひとりの思いを大切にした学級経営」「自分に合っためあてをもち、豊かなかかわりを大切にして、進んで運動に親しむ子の育成」「学力向上のための指導法の工夫」「基礎・基本の定着をめざした“教えて考えさせる”算数授業の工夫」「“たい”の溢れる授業を創る」、中学校が「一人ひとりが、基礎・基本

の定着を目指し、主体的に取り組むための指導法の工夫」「コミュニケーション能力の育成を目指した教科指導及び学級経営」「情報モラルの向上を図るための指導法の工夫」「基礎・基本の定着を図る指導法の工夫」です。

不登校対策強化事業について

昨年度から共同研究事業として始めた「不登校生徒を対象とした学習支援のあり方」の研究員の学校の中から、白山中学校、鴨宮中学校、泉中学校に不登校生徒訪問相談員を派遣し、家庭訪問で相談活動を行います。また、教育研究所に不登校対策支援室を設置し、不登校生徒訪問相談員を援助しています。

不登校生徒訪問相談員の感想より

それぞれの事例ごとに慎重な対応が必要だと実感している。そんな中で、訪問時にふと見せてくれた笑顔にほっとさせられ、1年近く何の進展もなかった生徒をマロニエ教室につなぐことができたこと、なかなか心を開かなかった生徒とコラージュをしながら素材をきっかけに会話ができて、その時間を楽しみに足を運ぶようになってくれたことは大きな喜びであった。

せっかくつながったところで夏休みに入ってしまうのが何となく心残りであるし、また、今不安定な生徒が休み明けにどうなっているかが気になるところであるが、明日、これまでの総括として、かかわりのあった生徒や今後新たにかかわる生徒の家を訪ね、会えない場合は手紙を届けるつもりである。



幼・小・中の生活実態調査を未来への指針に

幼・小・中生活実態調査の研究に関する研究員

1 はじめに

近年、多くの教職員から、子どもを理解しにくいと指摘されるようになりました。生活体験や自然体験の不足、基本的生活習慣や社会性や規範意識の欠如など、マイナス面ばかりが目につきます。

その要因は様々あると思いますが、住環境、少子化や核家族化、過保護や過干渉、IT化社会の進行など彼らを取り巻く生活環境の変化が関係していると思われます。子どもが変わったという言葉をよく耳にしますが、一体子どもの何が変わったのでしょうか。

そこで、私たちは「幼稚園、小学校、中学校の生活実態と意識についての調査」を行い、結果を分析することで、今、子どもたちは学校生活で何を考え行動しているのか、適応・不適応感情をどのような形で発散しているのかを考えることにしました。

また、今の子どもと5年後、10年後、20年後の子どもの意識と実態を比較する中で、目に見える過去を未来への指針とできるとも考えました。

2 研究内容

私たちの研究は、まず前回（平成16年度）調査を分析することから始めました。そして、分析を通し、継続的に調査して子どもの変化を追っていくもの、新たな調査をして今日的な問題について考えていくものがあるとの結論に至りました。

また、調査には子どもの実態を問うものと意識を問うものがあること、調査するこ

とによって明らかにすることを十分検討し、質問項目を精査することが確認されました。

研究の大半は質問項目・内容を検討することにあてられましたが、幼稚園、小学校、中学校で共通して調査したい内容（生活習慣）、その年齢時に独自に調査したい内容を明確にして、調査用紙を完成させました。

平成19年6月には、各幼稚園、小学校、中学校で調査を実施していただきました。現在、各校で集計していただいた結果を、さらに研究員で全市的な集計にしている段階です。

3 今後の取り組み

調査の結果をグラフ化して資料にしておくこと、調査結果や選択した理由から分析することが残されており、本年度中にはまとめて各幼稚園、小学校、中学校に示していきたいと考えます。

この調査をこれからの家庭教育、児童・生徒の指導の一助にいただければ幸いです。





郷土読本「小田原」の改訂について

郷土読本「小田原」改訂の研究に関する研究員

1971年、「市制施行30周年」を期に郷土読本「小田原」は、刊行されました。

その後、76年・81年・86年・95年度と改訂を重ね、現在5回目の改訂作業に入っています。

長山が、第1章「郷土の自然」を、渡井・遠藤・関野が、第3章「現代と生活」を担当しています。また、第2章「郷土の歴史」につきましては、改訂を見送りましたことを最初にご了承ください。

作業に入り、最初に行っていることは、基本的なデータの収集です。そのため、現時点で報告できる内容のごく僅かですが、入手済みの資料に基づいて第3章「現代の生活」の改訂予定箇所を何点か述べることで、我々研究員全体の間報告にかえさせていただければ幸いです。

さて、今回の改訂作業で扱う期間は、日本経済の「失われた十年」あるいは「ロス・ジェネレーション」と呼ばれる大量の若者達が社会に出て来た時代に相当します。この期間の小田原市の変化を5つの指標から見つめてみたいと思います。

① 83,354トン⇒83,372トン

② 14,200円⇒12,800円

70年度のゴミの年間総収集量は、36,000トンでした。それが、93年度には、83,354トンに達し、一時は85,000トンを越える時期もありましたが、現在は、前回改訂時とほぼ同量の水準になっています。また、一人あたりのごみ処理費用は、12,800円に低下しています。これは、リサイクル率の向上とゴミ処理費用に関する財政支出の縮小が主因と見られています。

③ 2,576名⇒2,246名

小田原警察署管内の交通事故による負傷者数は94年度と比較して330名減少しています。前回の改訂時には1000人以上増加していたことを考えますと大きな変化だと思われます。

④ 4.38%⇒9.29%

本市の生活保護率は、93年度に4.38%（月平均被保護人員8,618人）だったものが、05年度には9.29%（同22,134人）と急激な増加を示しています。

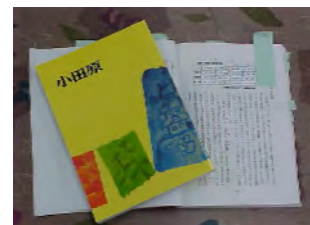
⑤ 1,417台⇒-629台

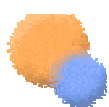
国道1号線本町における12時間交通量調査について見てみますと、85年～95年までの10年間に1,417台増加していたものが、95年～05年までの10年間で629台減少しています。日頃感じる小田原駅周辺の状況がデータで改めて確認できる気がします。

以上のような変化が見られるわけですが、これは、過去4回の改訂時に明らかになったそれぞれの変化とはかなり色合いの異なったものです。

今回の改訂では、前回から今回にかけて何が変化したのかを記述する予定で

すが、次回改訂時には第二次世界大戦後からの大きな流れの中での郷土・小田原の変貌を描く必要があるような気がします。これを、次回改訂に向けての課題として、郷土読本「小田原」改訂の中間報告を終わります。





小・中学校の連携をめざした国語の学習 ～書く力を中心に～

プロジェクト研修研究員(国語)

私たち国語科のプロジェクト研修も、3年目となった。

一昨年度は、「話す・聞く」を中心とした『「伝え合う力」を育てるために』というテーマのもとに研修を積み、「話す・聞く」力は「書く」「読む」の3領域をバランスよく指導して、はじめて育つ力であることを確認した。

そこで、昨年度は、最近の子どもたちが「文章が書けない」という声に着目し、研究を進めることとした。また、そのためには、小・中の更なる連携が大切であると考え、テーマを変えて研究を行った。昨年度は、このテーマのもとでの1年目の研究であったため、まず、小・中学生に「書くこと」についての実態調査を行い、その調査をもとに、児童・生徒に「書く」力をつけるための手だてを考え、実践していった。

1 「書くこと」についての実態調査

(アンケート結果)より

小・中学生とも「書くこと」に苦手意識を持っていた。好きな理由としては、「自分の言葉で表現することが楽しい」などで、自分らしさを表現できることに喜びを感じていた。嫌いな理由としては、「何を書いたらよいかわからない」「書き始めをどうしたらよいかわからない」などで、自由に発想することが苦手であったり、語彙不足、書き始めのきっかけがつかめない生徒の実態がうかがえた。

また、「書くこと」が楽しいと感じる内容は、小学校では、感想文、新聞作り、手紙などで、自分が思ったりしたことを自由

に書けるものが多く、中学校では、俳句、短歌、詩などの韻文や「夏休みの思い出」などで、長い文章より短い作品、書く内容がわかりやすいものを好む傾向にあった。

2 実態調査をもとにした「書くこと」を重視した授業の実践

- ① 日記・行事作文・教材ごとの感想(初発や終末)・視写など、書く機会を増やし、書くことに慣れる指導を行った。
- ② 題材の工夫や「書き方」のパターンを学習するなどして、楽しく、抵抗なく書くことができる授業を展開した。
- ③ 児童・生徒間の感想交流や作品を読み合うグループ活動などを通して、読んでもらう楽しさを味わうことのできる授業を試みた。
- ④ 国語辞典・漢和辞典の活用や視写・聴写・音読・読書などさまざまな授業を通して、語彙を増やすための指導を行った。

今年度は、昨年度の研究内容を土台にし、新たに小・中学校の教科書の中の「意見文・主張文」の教材を確認し、系統性を把握しながら研究を進めている。

11月には豊川小で公開授業が予定されている。「書くこと」の苦手な児童・生徒が、少しでも苦手意識がなくなるように、今後も研修を積んでいきたい。



小中算数・数学指導の連携をめざして

プロジェクト研修研究員（算数・数学）

1 平成17年度研究の概要について

平成16年度行われた小中学校学習実態調査を分析した結果、次の2点が大きな問題として明らかになった。

- ＊筋道を立てて考えることが苦手である。また、文章を読みとることができないために正しい立式ができない。
- ＊2つの数量がともなって変わるということが感覚的に理解されないため、関数分野を毛嫌いする傾向がある。（問題に取り組もうとしない児童・生徒が多い）

そこで、小中それぞれの指導に関する情報交換を行った。情報交換を行う上で話題が「ともなって変わる量」に絞られ、次のような問題点があがってきた。

- ＊教師側の課題として、「ともなって変わる量」の素地となる考え方は小学校の低学年より様々な場面で扱われているがそれを意識しながら指導していないケースが見受けられる。

- ＊グラフや図を使って具体的な数値を求めることはできるが、2つの量の関数関係を見だし、それをことばや式、説明文で表すことは苦手である。

- ＊文字使用が苦手であるために、未知数としての「 x 」と変数としての「 x 」の区別がつかずに混乱するケースがある。

- ＊時間の変化等、目で確認できないものを扱うために生徒にとってはつかみ所のない単元になってしまっている。

2 平成18年度研究の概要について

研究一年目の情報交換を踏まえ、どのように指導したら効果的に問題解決できるか模索した。具体的には次のことを意識しながら指導してきた。

- ＊関数分野に限らず色々な学習場面で式化することを取り入れ、式化（一般化）することの良さ（便利さ）を体験させる。

- ＊文字を使用する際には、できるだけことばを並列する。

- ＊児童が始めて「ともなって変わる」ということばに触れる小学4年生の段階では、算数的な活動を多く取り入れ、ことばの意味理解よりも感覚的理解（実感をともなった理解）を中心に指導する。中学校も同様に目で見て実感できるものを多く取り入れる。（表計算ソフトを利用し入力すると出力されることが体験できるものや理科の実験器具を利用したもの等）

- ＊様々な場面で、規則性を見つけるおもしろさや規則性の美しさを実感させる。

3 平成19年度の研究について

①過去2年間の研究を踏まえ、今年度は授業研究を中心に研究を進めている。「ともなって変わる量」を単にことばの意味理解だけに終わらせずに、それをいかに感覚的に理解させるかを中心とした授業づくりを行いたいと考えている。又、『遊び感覚』の算数・数学を大切にし、その延長上に「ともなって変わる量」の授業があるという視点で授業を行いたいとも考えている。

②今年度は関数分野に絞って、小中連携した系統図の作成も考えている。どのような指導のもとに中学校に入学してくるのかということと、中学校ではどのように指導が行われていくのかということを、互いに理解した上での指導に役立てられるものに仕上げられればと考えている。



小中学校における自立に向けた授業づくり

プロジェクト研修研究員（特別支援）

昨年度までの研修では「自立に向けた基盤づくり」をテーマに取り組んできた。

今年度は3年目のまとめとして、これまで積み上げた研修をもとに、「自立に向けた授業はどうあるべきか」を主題に研修を進めることとした。

昨年までと同様に地域の諸施設を訪問し、具体的な指導の重点を探り、並行して「自立」をどのように毎日の授業に取り込んでいくか、授業実践を行いながら研修していくこととした。

◎昨年までの地域施設の見学から

知的障害者通所訓練施設、授産施設、職業訓練校、養護学校などを訪問してきた。

いずれの施設でも、社会経済活動への参加を勧めるために、各種訓練を行っている。

働くことをより具体化し、実際の製品の検品や計量、箱詰め、出荷までを行い、賃金を得て、経済活動を体験し、就労へ結びつける。就職に結びついていくためには、{あいさつ、返事、用意された簡単な仕事をこなす能力、意欲、人柄}が重要であり、学校で何を知識として学んだかではなく、学ぼうとする姿勢、自立しようとする意欲が重要であるという点は各施設共通に聞かれた。このような意欲に関する項目は何も特別支援の生徒についてだけではなく、すべての生徒に育成されるべきものでもある。

また、それぞれの施設では、個々の能力に合わせた支援プログラムをつくり、個性に合わせた作業の充実を目指し、訓練目標を具体化して明示してあった。

実際に社会生活の労働に耐えられる人材の育成をどの施設も目指しているといった感じが強かった。

◎授業実践に向けて

施設や養護学校を見学し、また市内小中学校の自立へ向けての取り組みを検討していく中で、共通して扱われていたことは、指導・学習内容に関しては、生活単元の充実、個々の目標設定による作業教育等が重要であるということ、日常的指導に関しては、あいさつやコミュニケーション能力の育成をあらゆる場面で行う必要性を感じた。

これらの基本的事項をもとに、学習内容・指導方法を検討していった。

この過程でコミュニケーションやセルフコントロールの力をつける授業が重要であると考え、それを具体化したものとして、作業を取り入れた自立の授業を構成することとした。

今年度は横浜国立大学の准教授のご指導を受けることができ、すでに授業を観察していただき、夏季休業中にVTRをもとに児童の行動分析を指導していただいた。授業実践で生かし、より良い授業を公開できたらと考えている。





学校復帰をめざして

教育相談指導学級責任者

お弁当を食べる頃から、ちらほらと抵抗を表す言葉が出て来た。「足が痛いんだ。」とか「やらなきゃだめ？」とか……。

今日はしろやま教室とマロニエ教室の合同レクリエーション。学級指導員があれこれと頭を悩ませながら考えたのは『キックベースボール』。いきなり始めると乗りの良くないことが予想される生徒達。前段として、バランス感覚を試すレクを入れ、合わせてチーム別け。小6～中3までの異年齢集団が2つに別けられ、作戦タイム。ルールは極力簡単にして、ホームベースに置いてあるソフトバレーボールを蹴り、あとは塁を回ってホームインするだけ。

野球のルールを少し知っていれば要領よくやれそうなものなのだが、そうもいかないらしい。ボールを取って、どこに投げたらよいかわからない。それでもじきに野球の好きな子が指示を出し始め、子ども達はだんだんと動けるようになってきた。

恐る恐るボールを蹴っていたのが、思い切り蹴飛ばすようになり、点が入れば、ぴょんぴょん跳ねて喜び合い、仲間のナイスプレイに拍手が飛び、怪我を心配して「大丈夫？」と声をかける。

この日は、とても良い天気で、日陰のないグラウンドだったので、だんだんと顔は紅潮し、砂埃で汚れてもくる。でも、誰も「やめよう。」とは言わない。2試合目にもなると、皆コツをつかみ、ボールがよく飛び、一回に18点も入る……。学級指導員が皆の疲労感を感じたところで、レク終了。

市民グラウンドからマロニエに帰ってきて、帰りの会での子ども達の様子は疲れ切っていた。

炎天下、短時間とはいえ、2つのチームにわかれてのキックベースボール。みんなですらったスポーツ大会。疲れた表情の中に「今日の私は頑張った」という満足げな表情もちらほら見え、2時間前の自分とは違う自分を感じた時間であったと思う。

自分にかかった負荷。その負荷に負けずに挑戦してみる。そして、「できた」と言う感覚を実感すること。それを『自信』へと変えること。そういう経験が多くあって欲しいと願っている。

人との関係を作ることの苦手な子どもが、勇気を振り起こして挑戦してみる。そして、人とのふれあいを通して安心感を得て、自然体でいられるようになっていく。相談指導学級でパワーを蓄え、また新たなステップに進んでいく。

教育相談指導学級の目標は学校復帰にある。どうしたら学校に足が向くようになるのか。学級スタッフは顔をつきあわせて考える。子どもが学級の生活だけで終わらないよう、「学校に行ってみようかな」という思いを持ってくれるよう、日々願い、考えている。





学ぶということ

学校教育課 指導主事

これまで中学校の国語の教師という立場であったために、小学校の授業を見る機会はそれほど多くはありませんでした。

学校訪問で小学生の授業をじっくりと参観することになり、とても新鮮で興味深かった反面、授業後の研究会のことを思うと初めての体験に多くの不安が感じられました。

6月のある日、小学校の校内研究会に参加させていただく機会がありました。

授業の時刻が近づいてくると、今までに感じたことのない緊張感が自分に迫ってくるのを感じました。開始5分ほど前になると、校長先生が「そろそろ……」と声をかけてくださり、教室へ向かいました。

授業は第2校時、4年生の国語の授業参観です。廊下に出ると、甲高い騒がしい声が聞こえてきました。

「まだ、休み時間だし、少々うるさいくらいの方が元気があって子どもらしい。」などと思いながら歩いていくと、その声は次第に大きくなっていきました。

騒がしい声は研究授業が行われる教室の中から聞こえてきました。授業開始の2分ほど前です。「研究授業の時ぐらい静かに待たせておけばいいのに……」と教室に入った瞬間、見た光景にとっても驚きました。

児童が、教科書の音読に取り組んでいたのです。それも、全員です。音読を行っていない児童はだれ一人いませんでした。これにはとても驚きました。中学校の国語の授業では見たことのない光景で

した。その驚きをよそに、授業が始まりました。

本時の学習目標が設定され、最初の学習活動は、本文の音読です。方法は、ひとり一文ずつを分担して、次々に読んでいく方法です。先ほどの練習の成果で、一人ひとりが自信にあふれ、しっかりとした発音で音読することができていました。その後の展開においても、児童が生き生きと発言する中で、国語の授業が進められていきました。

私たちは、各学校において、子どもに生きる力を育むことを目指し、「自ら学び自ら考える力」の育成を図ると共に、基礎的・基本的な内容の定着を図り、個性を生かす教育の充実に努めてきました。

子どもの個性や能力は一人ひとり異なっていますが、自分の知らないことや分からないことについて、知りたい・分かりたいという探求心や今の自分の能力をさらに伸ばしていきたいという向上心はすべての子どもが等しく持っているものだと思います。

教育とは、その子どもたちに対して、「どのように学ぶのか」「どのように考えるのか」という構えをしっかりと築くための支援をすることだということを改めて感じたひとときでした。





研 究 所 だ よ り



教育研究所では、今年度も、研究・研修や教育相談などの所管事業を充実させる運営を心がけ取り組んでいきますので、よろしくお願いします。

教育研究所指導主事

◆教育公開講座・教育相談研修会より◆

8月に開催した教育相談研修会に参加いただき、ありがとうございました。

今日的課題である不登校児童・生徒への支援や教育相談をテーマにした研修会でしたが、先生方の関心の高さを感じました。

第1回「ロールプレイによる教育相談演習」

月 日 平成19年8月21日(火)

講 師 大学教授

◇参加された先生方の感想等

- ・ロールプレイは大変勉強になった。
- ・ロールプレイを真面目に演じるほど発見が大きかった。
- ・9月からの教育活動にいかしたい。
- ・今回のような実践的な研修を希望。

第2回「学級開きに使えるグループワーク」

月 日 平成19年8月22日(水)

講 師 大学教育研究所講師

◇参加された先生方の感想等

- ・即実践できるエクササイズだった。
- ・相手との距離感、視線など、教育相談を行うときの参考になった。
- ・自己表現やコミュニケーションの楽しさをエクササイズで学んだ。
- ・シリーズでお願いしたい。



第3回「不登校はなぜ起こる

―多様化する要因とその予防―

月 日 平成19年8月23日(木)

講 師 登校拒否文化医学研究所の先生

◇参加された先生方の感想等

- ・感情交流の大切さを実感した。
- ・父性の大切さや子どもはかけがえのない一人だということを心に刻みたい。
- ・具体的事例で支援の方法や今後の方向性を話していただき、参考になった。
- ・各校1名以上参加をし、教員も学習すべきだと思う。

◆教育講演会より◆

今年度は、弁護士で、東京六大学野球審判員、元日本高校野球連盟審判員の清水幹裕先生をおむかえし、「マスク越しに見た青春～大人に感動を与え



る子どもの育成をめざして～」という演題でご講演いただきました。様々なエピソードを交えた熱い講演に、9月からのパワーをいただきました。

小田原教育 第107号

発行日 平成19年9月18日(火)

発行所 小田原市教育研究所

発行者 所長 小宮 郁夫

〒250-8555 小田原市荻窪300

電話 33-1730

研究所ホームページアドレス

http://www.ed.city.odawara.kanagawa.jp/kyouiku_ken/index.html